

彼女の給料の七ヵ月分はあった。)そして毎晩アメリカ兵や英国兵やそのほかの国連兵とおどろ、小部屋で彼等に体を売った。(彼女はデパート時代ズベ公とはつきあったけれども、男と遊んだことはなかった。それでこのキャバレーでも、はじめはほとんど強姦同様の有様で客をとらされたのである。しかしもう子供のときのような痛みや悲しみは湧いてこなかった。)私の一生は、あの十一才の事件のときもうふみにじられてしまったのだ、と彼女は考え、そのことをいろんな兵隊にしゃべり、やけっぱちな態度で身をまかせた。

そして、てい子についての記録の結末はいささか小説的である。ある日——もう一九五二年にはいつてからだったが——彼女がこれから彼女を買おうとする兵隊と腕をくんで港通りを歩いていたとき、やはり向うから水兵と女が並んで歩いてくるのとぶつかった。すれ違ふとき、彼女とその女はたがいにくろりと睨みあうようにしたが、瞬間がく然として、二人とも立ちどまってしまった。その女は、ほとんど昔の面影はなかったが、たしかに三崎麗子であった。——少くともてい子にはそう思えた。彼女は声をかけようとしたが、その女があわててつんと前を向いて通りすぎていったので、彼女もそのまま通りすぎてしまった。彼女はもういちどふりかえってみたが、その女はとうとうふりかえらずに歩いていったというのである。しかしわたしは麗子という女性に逢ったことがないので、このてい子の話の真偽を断言することはできない。(類似例七)

第二章

敗戦——政府・銀行・売春業者の陰謀——

強姦！ 強姦！ 強姦——慰安所——

美徳の利用——性病まんえん——オフ・リミッツ

洋娼の発生は、米軍の日本占領と同時にじまった。

発生の根本的な原因が、日本の敗戦と米軍の上陸にあることはいまでもあるまい。しかし、敗戦後二ヵ月もたたないうちに全国で三万五千人もの洋娼が発生させられたのは、決して米軍の上陸そのものに原因があったのではなく、当時の日本政府が銀行や売春業者と結んで積極的に大量の洋娼を作りだしたためであった。

占領軍当局は、兵隊たちが日本の女性から性的サーヴィスを受けるのを黙認または公認する態度をとっていたが、自分からすすんで慰安所を作ろうというほど熱心だったわけではない。ところが日本の政府の方では、征服者の歓心を買って自分たちの権力を維持するため

のいちばん効果的な方法は、女を抱かせるほかにないと考えて、何も知らぬ女性たちの肉体をアメリカ兵の獣のような欲望の前にささげたのであった。

八月二十七日（日本敗戦からわずか十二日後！）、当時の内務省・外務省・厚生省・警視庁などの局長会議がひらかれ、「占領軍との摩擦をできるだけ少くし、また占領軍によって必要以上に治安が乱されるのを未然に防止するために」全国の公娼および公娼施設を総動員してアメリカ兵へのサーヴィスにあたらせるという結論がうちだされた。翌日、具体的な計画をたてるために内務省警保局と厚生省の代表がふたたび会談したが、その席には全国有数の売春業者であるS、Oの二人と、日本勸業銀行の代表者一人もとくに列席した。この第二次会談で、計画の実行は内務省の指示によって全売春業者が結束しておこなうこと、政府・警察は極力業者の便宜をはかり法的拘束力をもつ秘密指令をだすこと、また業者の要する資金は勸業銀行がその十分の七以上を引受けること、などの基本的な方針がきめられた。現在もなお続いている政府（警察）・銀行・売春業者の宿命的な結びつきは、早くもこのときからはじまったわけである。

さらに九月十日、浅草の待合で五十七名の売春業者が会合した。その席には内務省・銀行の代表者、および占領軍側からオプザーヴァーとして、一人の高級将校（リック中佐？）が数人の通訳・護衛をしたがえて姿をみせた。この日の会談では、業者はその支配下にあ

る公娼全部を提供すること、士官以上にたいしてはとくに美しい芸者などをあてがうこと、また暴力団を動員して足りない分の女の数を手早くそろえること、業者と暴力団による一般女性の勧誘・誘拐・拉致などを当局は黙認し、場合によっては協力を惜しまないこと、勸業銀行側の出資は少くとも二千四百万円以上であるべきこと、売春業者全部によって、R A A (Recreation & Amusement Association) —— 日本語で特殊慰安施設協会、通称進駐軍慰安所経営協会とよぶサーヴィス会社を設立すること、などのこまかいことがきめられた。

これらの売春業者は、戦争前・戦争中を通じて軍部や政府とくされ縁があった。たとえばSは海外の日本軍に慰安婦を供給する役目を一手に引受けていたし、Oは内地勤務の部隊が利用する各地の遊郭の総元締であった。Bは軍の調達機関である偕行社に将校専属の娼婦たちを送りこんでおり、Yは警察や特高のサーヴィスを受持っていた。戦争でいちばん儲けたのは武器と麻薬を作った三井・三菱などの財閥とこれらの売春業者とである。敗戦でいちばん儲けたのもこれらの売春業者である。また再軍備でいちばん儲けつつあるのも、これらの軍需資本家と売春業者とである。今度戦争がおこったとしたら、いちばん儲けるのはやはりこうした人間たちにちがいない。軍需資本家は割にめだちやすいし、また戦争に負けるといくらか損する（といってもせいぜい資本の解体ぐらいで、国民のように

生命を失ったり原爆でやられたりはしなかったが）けれども、売春業者は国民からみえないところで、つねにその時々の権力者の保護を受けながら、戦争が勝てば勝ったで儲け、負ければ負けたで同じように儲けているのである。太平洋戦争がはじまった一九四一年には、職業的な売春婦は全国で約三万七千人いたが、その後、動員・空襲・疎開などのために減少をつづけ、敗戦当時にはわずか一万三千人ぐらい、それも大部分は戦災を受けない地方にあつまり、札幌・秋田・新潟・金沢・京都などをのぞけば、都市には少ししかないかった。したがって敗戦後売春業者たちがやらなければならなかった仕事は、先ず第一にこれらの日本人用売春婦を米軍用にきりかえることであり、第二に戦争中「転業」していた売春婦を米軍用として再組織することであり、第三に一般の女性をだまして自分たちの支配下に組み入れることであった。占領軍の数は今年中におよそ五十万に達するだろうとリック（？）中佐が洩らしたので、業者たちは少くともその十分の一の売春婦をできるだけはやくそろえることにきめた。「われわれの男にかけても」と彼等は中佐にいった。「進駐軍の方々にご不自由をおかけするようなことはいたしません。誓って三ヵ月以内に五万人そろえますからどうかご安心ください」……

第一の仕事はかんたんに済んだ。一万三千人の既成売春婦のうち、占領軍のこない町や村にいる者、また金持の日本人となじみになっている者などをのぞいて、約一万一千人が

洋娼にきりかえられた。おかみの命令だといっているので彼女たちの反対はまったくなかった。

第二の仕事も、「転業」していた売春婦をさがす手数がめんどうなだけで、わりにかんたんであった。転業していたとはいってもその彼女たちの多くは手紙などでたがいに連絡をとりあっていたので、ひとりみつけるとすぐ大勢の居所がわかった。新聞広告やポスターなどが効果をあらわした場合もあり、また何よりも警察の協力がものをいった。九月末までにおよそ一万六千人のもと売春婦が業者の支配下に復帰してきた。

第三の仕事も、思ったほど困難ではなかった。当時、東京だけでも少く見積って六万人、全国では四十万人以上の若い女性が、空襲で家や家族を失い、飢えと不安におびやかされていたから、彼女たちをだまして慰安所へ送りこむことはやさしかった。学徒勤労令・女子青年団徴用令などによって工場や農村にひっぱりだされていた大小の集団のうち、戦災でかえる場所のなくなった女性たちも各地で利用された。彼女たちをだますときの内務省・警視庁・売春業者一体となった協力は水ももらさぬほど巧みにおこなわれた。十一月のすえまでに二万人ちかくの女性たちがこの経路をたどって洋娼に仕立てあげられていった。

さらに、占領軍の日本上陸後三ヵ月間に、全国で三千七百人以上の女性がアメリカ兵によって強姦された。これは売春業者・警察・洋娼を調べて明らかになった最小限度の推定数である。実数はこの数倍にはなっているであろう。それは日本の女性は、そんな被害を

受けても世間体を恥じて公表しないことと、よしんば訴えても何にもならず、世間に自分の恥を発表するだけに終ることを知っているからである。日本の警察はアメリカ兵が彼女たちを強姦しても深く追求せず（敗戦国の警察にその権限はなかった）、MPは兵隊の乱行を放任するだけならまだしも、横須賀に起った事例のごときは、こわれた貨車のなかに住んでいた若い妻とその妹が四人のMPに輪姦される始末であった。売春業者はこれらの犠牲者たちを特有の嗅覚でかぎつけ、同情したり脅迫したりしながら慰安所へくわえこんでいった。

こうしたさまざまな経路をたどって狩りあつめられた女性たちが、逃亡することなくそのまま慰安所へ住みついてしまったのは、そこで白米とコンビーフが腹一杯たべられたからでも、武装したガードが彼女たちを見張っていたからでもなかった。白米とコンビーフは三日もたないうちトモロコシのかゆにかわり、各慰安所のガードは九月三十日から十月二十日までのあいだに順次に廃止されたけれども、そのあと逃亡者がむしろ少くなっている事実が、このことを明らかに物語っている。彼女たちは（十月二十日以前は別としても）慰安所から逃げだせなかったのではなく、逃げだそうとしなかったのだ。彼女たちが戦争中たたくこまれた教育、日本の女たちが長いあいだつちかっていた「犠牲になるという諦めの美德」は、彼女たちの肉体を商品化するためにみごとに役立った。彼女たちは

「君らこそ畏くも皇族の姫宮方をはじめ日本全国の良家の女性たちの操を守る防波堤であり、軍艦も飛行機も失った日本が最後にくりだした荣誉ある特攻隊である」という政府と業者のこう、かつな宣伝を信じきっていた。アメリカ兵や暴力団に犯されて慰安所へ送りこまれた女性たちでさえ、「どうせこうなったのだから私たちの犠牲によつてほかの人がいくらかでも救われるなら」というやりきれない諦めの境地に安住してしまった。ある者は「一死報国」とそめぬいた手ぬぐいで鉢巻をしてアメリカ兵に処女を与え、ある者はいったん逃げようとしたが、座敷で祝い酒をのんでいた業者や警官に「お国のため、天皇陛下のため、同胞女性のためだ。逃げるのは非国民だぞ」とどなられてアメリカ兵の待っている部屋へかえっていった。米軍当局は彼女たちのことをServing Women（慰安婦）、あるいはOrganized Prostitutes（組織された売春婦）とよび、政府と業者は進駐軍用慰安婦とよんだ。しかし彼女たち自身は、内務省の役人が発明した「特別挺身隊員」というのが自分たちの正式の肩書であることをすこしもうたがわなかった。

慰安所へやってくるアメリカ兵たちは、業者に日本の紙幣で金をはらった。この金はいわゆる終戦処理費のなかからアメリカ兵に与えられたもので、もとは日本人の税金である。日本人は苦しんでおさめた税金で自分たちの恋人や姉妹の肉体をアメリカ兵に犯させ、売春業者に儲けさせていたことになるが、こんなことはだれにも知らされてなかった。

GHQは兵隊たちが慰安婦の手に直接金を渡すことを禁じ、業者と警察は慰安婦が兵隊たちから直接金を受取ることを禁じた。もしこれが禁止されていなかったら彼女たちは自分の行為が「挺身」でなく「売春」であることにいやでも気がついただろうし、業者の方でも彼女たちの稼いだ金を全部搾取することはできなかったろう。彼女たちの不幸なモラルは先ず「挺身」のために利用され、ついで業者の儲けのために利用されたのである。

「特別挺身隊員」としてのはじめの悲壮感がゆるんでくるにつれて、彼女たちは慰安所の生活に妥協し、順応しはじめた。「お国のため、皇族の姫宮のため、同胞女性のため」の「挺身」であることを耳にタコができるほどきかされ、また無理にもそれを信じなければ毎日の慰安所の生活にたえてゆくことが到底できなかったために、彼女たちには最初から犠牲の意識だけがあつて羞恥感が欠けていた。慰安所の生活は悲惨であつた。体が変になつてもアメリカ兵の要求は拒むことが許されなかつたために、恥部や子宮に傷をつけられたり、廃人になつたりしていく者がつぎつぎにでた。第三国人から業者の手を通じて多量の麻薬がばらまかれ、中毒患者がふえていった。また、以前からの公娼の一部やアメリカ兵たちの一部がもつていた性病が、たつた二カ月半ほどのあいだに全部の女性に伝染し、さらに在日米軍全体の三十五％に伝染した。一九四六年の一月には、米軍の罹病率はひどい部隊では六十八％におよんだ。GHQのV（ヴィックス？）大佐はある日、日本政府の

係官をよびつけて「日本の女は性病の巣だ、不潔だ、悪魔である」とののしつた。（このV大佐がさる芸者を追っかけまわしてついに淋病にかかったことが、某衛生伍長の話で明らかになつている。）係官は平謝りに謝つてかえつていったが、この事件は来るべき慰安所閉鎖命令の前ぶれであつた。

二月、GHQは軍医部と衛生局が提出した「RAAに従属する日本人慰安婦の九十％は保菌者であり、また海兵隊の一個師団を調べてみたところ、その六十％が保菌者であつた」という報告を見て戦慄し、三月にはついにすべての慰安所への将兵の立入りを禁止するにいたつた。当時OFF LIMITSと書かれた黄色い札が各地の占領都市にみられたのをわたしたちはおぼえているが、あの札を掲げた家々はみんなRAAに従属した慰安所だつたのである。（もつとも、当時はふつうのダンスホールや電車などまでもOFF LIMITSの札をだしていたのがあつたが、これらは別の理由から立入り禁止になつていたのである。誤解のないため、とくにつけ加えておく。）

占領開始から慰安所が閉鎖されるまでの六ヵ月間に、のべ七万人の日本女性が慰安所にはいったが閉鎖当時働いていたのは約五万五千人であつた。このことは、約一万五千人の女性が慰安所内で死亡したり、廃人になつたり、性病がひどくなつて追いだされたりしたことを物語っている。一方売春業者の方ではこの六ヵ月間に少く見積つても一億二千万円

（現在『一九五三年』の貨幣価値に直して約二百億円）の利益をあげ、さきに借りた金を銀行へかえし、戦災で焼けた売春施設を復興し、保守政党へ献金し、官僚にも袖の下をばらまいた。慰安所の閉鎖は業者にとって痛手にはちがいがなかったが、これだけ金があれば、ほかの事業にのりだしてもよく、またほかの方法で洋娼企業をつづけることだって不可能ではなかったのである。

業者が預金した七千万円ちかくの利潤を銀行はことごとく歓楽街の建設資金に投資し、各地の高級料理店・キャバレー街・赤線区域などは国民のどん底の生活をよそに急激に復興していった。

第二部 街頭への進出

第一章

- 1、N病院事件
- 2、名古屋事件
- 3、室戸みね子
- 4、浅見真佐子
- 5、斎藤悠子
- 6、大井みどり
- 7、丹野紀久子
- 8、桜井睦子

1 N病院事件

四六年の四月四日、つまり慰安所がオフ・リミッツになってまだ一月たたないとき、怖い事件が東京におこった。

午後十一時半ごろのこと、大森のN病院（『中村病院・その後廃業し、跡はビルと道路